

《BLACK CIRCLE is NOTHINGNESS》のための ステートメント

/

ほんとうのお話として (記憶が正しければ...)

この展覧会は、現存しない同名タイトルのペインティングシリーズから発想を得ました。そのシリーズというのは、2000年のロンドン留学中に描いた三点組の油彩画です。(本展覧会に出品している作品は、写真をもとに、ほぼ同一の構図で縮小し再制作しました。)

当時のわたしが興味を持っていたことは、絵に対峙した時の人の反応について。というのは、二次元の絵画表面に仮想の奥行きを見出せるという認識のルールの共有のこと。__この様なある種アクロヴァティックな変換が許容されるのなら、黒のペイントを実在不可能な「無」だと言い切っても了承されるのではないか、という問いから導きだされる反応に、ユーモアさえ含んだ余剰を期待していました。ところが実際は、自分のペインティングを指差しながら「黒丸は無でアリス」とだけ繰り返す異国人に対して「出た！日本人の『無』話」、「禅ですか〜？」と言わんばかりの反応に、拙い英語しか話せないわたしは、へらへらと情けない笑いを浮かべることしかできませんでした。この経験は、当時のわたしの心に突き刺さり、以降にこの作品を続ける意思を消沈させました。しかしながら最近になり、もう一度「『無』観念的なこと」を考え／話してみようと思いたちました。

ギャラリー空間には、大きく分けて4種の作品が展示されています。先述の再制作のペインティングシリーズの3点《Black Circle is Nothingness》／鏡に油彩で円を描いた《BLACK CIRCLE is NOTHINGNESS》／二点一組の写真《Untitled》／ポストカードに黒丸を描いた《BLACK STAR》シリーズの30点。これら全てに「黒丸」が描かれていますが、当然ながらあるのは「無」ではなく、隠喩として、もしくは近似値としてのそれらしき事象の存在です。

鏡の作品《BLACK CIRCLE is NOTHINGNESS》では、鑑賞者の動きに合わせて、見えないもの、隠されたものが移動します。わたしは子どもの頃に「自分が見えないところには虚空が広がっている」という妄想を抱いていました。その時、その瞬間に自分の眼に見えていないものを信じることができずにいました。鏡の現象は、この妄想を拡げる入口でもありました。鏡の中は見えているので信じられ、自分の背後は見えないので信頼できない、という虚実の反転した世界として機能していました。

ポストカードの《BLACK STAR》シリーズでは、肖像部分が黒塗られることにより有名性が失われ、無名化し、それぞれが等価の存在として固定されます。ですが、それよりもむしろ、「私」が選び、購入した時点でそれら(ダ・ヴィンチ、ピカソ、マチスなど)は、一枚150円程度の存在になっていたのです。

写真《Untitled》で際立つのは、黒丸よりもむしろひとの皮膚に書き込まれた「BLACK CIRCLE is NOTHINGNESS」という文字です。一見、タトゥーにも見えます。強いメッセージを放とうとする体裁がそのメッセージの無意味さを強調するものでもあります。しかしながら、タトゥーのアイデアを夫に話した時に、(彼が堅実な家庭に育った一般サラリーマンであることもあり)猛反対され、終には「離婚する」とまで言い出したので、結局そのアイデアは諦めました。タトゥーのように見える文字は、ポストカードの作品に用いた Dr. Ph. Martin's 製の色名「BLACK STAR」というインクで描きました。

このテキストを書いている最中に、友人から「アリ死んじゃったね」というメッセージが入りました。当然、このアリ=私ありではなく、ボクサーのモハメド・アリが永眠したというニュースでした。父がモハメド・アリのファンであったことで、アリはわたしの名付けの由来になりました。そのことでアリとわたしは、ある意味において近似値にある、という思いは確かにありました。今回、「無」を考える時、無と死の近似値には触れずにいたのですが、アリの死 = もう一人の私の消滅によってわたしの世界は少し変容してしまったようです。

《WHITE CUBE IS EMPTINESS》のための ステートメント

/

ほんとうのお話として (記憶が正しければ / 未来が計画通りならば ...)

展覧会タイトル《WHITE CUBE IS EMPTINESS》は、二年前に同ギャラリーで開催され、《BLACK CIRCLE is NOTHINGNESS》と銘打たれた展覧会 / 作品からのことば遊びとして発想されました。「黒と白」、「無と空」、どれもそのことば自体で観念的な世界が無限に広がる鍵になり得ます。ですが、「白い箱は空(クウ)であります。」ということばをわたしが得た時、それは、二年前の個展の作品と同様に自分が絵を描いていた時の経験を思い出す契機になりました。

当時のわたしが好んで考えていたことに「地平線は直線なのか曲線なのか」という問題がありました。これももちろん認識の視座によって変化するということは分かっていました。球体である地球上においては、物理的に地平線は曲線であり、一方、透視図法に用いる地平線は、観念的に直線です。では、自分の立っている地面が平らであるという体感的認識の下、地形や建物に邪魔をされて視認できない隠された地平線を直線と捉えるべきか曲線と捉えるべきか？

ここに水平であると約束された一本の棒があるとして、この棒の長さをどんどんと延長していくと、やがてその両端は地球の重力によって、曲線を描くこととなります。この棒は、直線的であり、同時に曲線的であると言えます。

「アンチノミー」ということばは、帰国後暫くしてから知りました。

わたしがロンドンにいた頃、初めの年はゴールドスミスカレッジの大学院準備コースに通っていました。ある時、同校 PH. D コースの生徒で、わたしたちのコースのチューターのジャスパー (Jasper Joseph-Lester / コンセプチュアルアーティスト) と話していました。

‘What do you think, how a horizon would look, if the surface of the earth was endlessly flat?’

わたしは時折こんな質問をチューターたちにぶつけていました。逆に彼らからの質問には大抵英語がわからない振りをしていました。

振りではなく、ほんとうに理解できなかったのかもしれない ...

「この地球とは違って、大地が限りなく続く平面だったとしたら、地平線はどう見えると思う？」

「同じように見えるよ。」

「その通り。」

今、思い返してみると、これは間違った答えでした。なぜなら「見る」「見える」ということには、光の要素が不可欠です。無限に続く平面上に永遠の光の存在があれば、無限の距離の先にごく細い線のようなものが見えるかもしれません。しかし、永遠の光が担保されない、例えば太陽の光に頼るならば、それは有限なので、無限の平面の先には線ではなく帯状にぼんやりと浮き上がる黒い虚空の闇が見えるのだと思います。

やはりゴールドスミスカレッジで別のチューター、ジェーン (Jane Harris / ペインター) と話していた時のことです。

‘You are too much talk about negative things such as nothingness or emptiness.’

この意見には違和感を感じました。‘nothingness’ や ‘emptiness’ を考えることは何もネガティブではありません。また、この両者は同じではありません。空(クウ)には容器の存在を含意します。《WHITE CUBE IS EMPTINESS》「白い箱は空(クウ)であります。」を当時のわたしに渡せば、当然これを真っ白いキャンバスと解釈したことでしょう。真っ白いキャンバスにグレーの地平線を描き、無としての黒丸を描く。これがわたしが描いた最期の絵でした。

2019年に《Grey horizon means death.》が発表されます。